



コスタリカ共和国 草の根技術協力

「生活改善アプローチによる農村開発モデル事業活動報告」

No. 23

2017.8.15

～自覚と折り返し地点～

NPO 法人イフパット 研究員 宮崎 雅之  
(現地調整員/生活改善ファシリテーター)

Hola! こんにちは。4ヶ月半の滞在のうち4ヶ月が経過し、第一回コスタリカ滞在が終了しようとしています。そんなある日、たまたま副市長からオロティナ市の体育館で行われているバレーボールに誘われました。そして、一時帰国一カ月前にも関わらず、市役所バレーボール部が設立され、毎週月曜日の夜に練習が行われるようになりました。

さて、活動はというと、まだまだルイスと現地調整員に頼りがちな体質に大きな変化はありませんが、再度自分たちでオロティナ市にてモデル集落を形成するという自覚、またプロジェクトの折り返し地点に差し掛かり、残りの期間で何を行う必要があるのかという共通認識の確認を行いました。9月からは現地調整員がいないことから、市役所の生活改善専従職員であるルイスを中心に活動の計画、実施されるようになります。

#### ■セバディージャ・ノルテでの活動開始

順調に第一回目のワークショップを終え、ファシリテーター内での振り替り会議を行い、次回の内容も協議をして、準備万全で迎える予定だった第二回ワークショップですが、開催場所である住民のお宅に訪問すると、住民女性がタオルで目を抑えています。挨拶のため近づくと「近づかないで。」とのこと。よく見ると、目が真っ赤です。話によると、コスタリカで流行している流行性結膜炎に感染したようです。感染力が強く、対処方法は安静にして他人との接触を避ける。というわけで、やむを得ず延期。そして、日を改めて行った第二回ワークショップですが、会場に集まったのはたったの3人でした。ちょうど、この日は聖母マリアの日ということで、Romería(ロメリア)という聖地巡礼が行われていま

した。参加者は、巡礼が行われる日だがワークショップに来ると言っていました。しかし、最終的にはほとんど来ないと結果になりました。ということで、第一回ワークショップが行われてから、約1ヵ月半が経過してしまいました。この状況では、住民のほとんどが何も覚えてないだろうということで、仕切り直すことにしようと、会議で決定しました。

前途多難なスタートですが、心機一転新たな気持ちで再スタートを切りたいと思います。また、3つ目のグループということで、サンタリータ村またセバディージャ村での経験を含め、いままでより、より効果的かつ効率的なワークショップの構築、またモデルケースとして文書化を目指し、4つ目以降のグループで基盤となる資料作成にも取り組み始める予定です。



#### ■和田短期専門家の来コスタリカ

7月下旬に当 NPO の和田主任研究員が生活改善の短期専門家としてコスタリカへ来ました。今回は、下記3つのテーマに取り組みました。

- 1) オロティナ生活改善チームが家庭訪問を行う目的と取り組む姿勢を改善、向上できるように後方支援・助言する。

2) 同チームのファシリテーション能力向上に向けた支援・助言をする。

3) 複数省庁連携チームの意味について再認識するよう同チームと協議をする。

2週間という短い滞在であったが、オロティナのファシリテーターチームはじめ、コスタリカ全地域のファシリテーターにとって有益な活動となりました。オロティナチームに関しては、集落住民に対してのアプローチの中で、何かが足りていないと感じていましたが、和田専門家のワークショップ後それが明確となり、今後は集落でのワークショップ後、参加者の反応をチーム内で共有・分析し、次回活動を計画する重要性に気がきました。

また、農牧省本庁チームから依頼のあったファシリテーション手法技術向上研修会を全国7チームに対して行いました。その中で、生活改善を通しての意識変容やお金のかかる改善についてのテーマも取り上げ、生活改善は精神的な変化やお金かからない改善だけを追い求めているわけではないこと確認しました。同時に各チームでの集落活動の共有も行い、モチベーション向上にも繋がりました。



#### ■定期家庭訪問での活動参加者からのコメント

・Maryeris (マリジェリス)

なかなか上手くいかないことや、納得いかないことはあるけど、前を見て進みたいと思う。旦那の協力を乞うのは忍耐はあるけど、やり続ける必要がある。私はやれることを精一杯やりたい。

・Dina (ディーナ)

私は生活改善アプローチの考え方を教会の仲間に普及している。自分で実際に家庭の改善活動を行うよりも対人への普及は経験上難しいことは知っているが、それでもいろいろな女性に教会で説く精神的な話とは別に、生活改善（自ら行動すること、生活面で工夫すること）を伝えることに重要性を感じている。実際に母親に対して、雨の日に濡れながら野

外にあるかまどで調理している姿を見て、「どうしていつも濡れながら調理をしているのか」と問いかけた。その後、母親はかまどの上にアルミ板を設置した。少しずつこれまでに学んだ生活改善の種を残せている気がする。

・ Yessenia (ジェセニア)

自分は家庭菜園をグループ員の中で始めたのは一番遅いが、今はみんなに追いついて、立派と言えるほどではないが、それなりに形になった家庭菜園が持ててとても嬉しい。

・ Isabelle (イサベル)

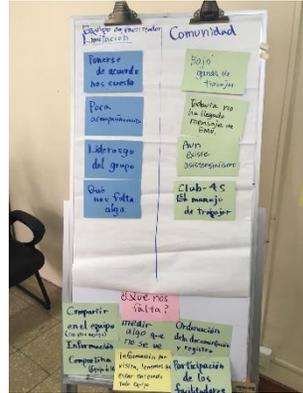
以前は家族の不幸があった際は家に引き籠り、落ち込んでいるだけだった。しかし、悲しいことがあっても現在は生活改善グループの何かしらの活動があるため、それに参加しようと努めている。グループ員と一緒にいると気晴らしになるし、何かと一緒に学習することで元気になる。



## ■折り返し地点

和田専門家とファシリテーターチームとの振り返り会議の中で、プロジェクトの期限についての話し合いの時間を取りました。その中で、プロジェクトに足りてないものについての議論が行われました。

前号でも少しお話させて頂きましたが、ファシリテーター全員が期限（時間）に対する意識や目標達成に向けて逆算をして計画を立てるのが苦手なようです。期限が決まっていれば、必然的に実施することも決まって来ます。また、対策を考えます。集落レベルでのプロジェクトは継続的に続きます、しかし草の技術協力事業のプロジェクトには期限があります。その期限が来た時に住民が一人立ちをして、ファシリテーターを必要としない姿があるのが理想です。そこに対する意識付け、どのようにその位置に到達しているかを描く必要があります。彼ら自身が目標達成に向けどのように行動すればいいかを引き続き助言していきます。



それでは、また次号で。¡Chao!(チャオ)